

# 東日本大震災救援ニュース

2012年1月25日  
通信第20号  
発行：災害対策本部

## 日本社会福祉士会の震災支援取組み状況

- 1) 宮城県石巻市稲井及び岩手県大槌町の地域包括支援センターの今年度の支援は終了しました。
- 2) 宮城県及び岩手県への活動者派遣に関する調整のため、12月12日、12月25日～27日と副会長および事務局が、被災地の地域包括支援センター等を順次訪問しました。
- 3) 宮城県の宿泊拠点を登米市のラボラーレ登米から石巻市内に確保しました。
- 4) 厚生労働省第3次補正予算事業の一つである「被災地における中長期の心のケア活動」について、派遣者を募集します。(詳細は、5・6ページをご参照ください)

## 日本社会福祉士会の被災地支援の実績

(1月15日現在)

- 1) 宮城県
 

4月1日～9月30日	東松島市(地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ404名を派遣)
4月20日～11月4日	南三陸町(地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ593名を派遣)
4月28日～12月27日	石巻市(稲井地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ618名を派遣)
5月11日～	石巻市(渡波地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ601名を派遣)
6月3日～9月1日	石巻市(中央地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ224名を派遣)
- 2) 岩手県
 

4月1日～4月29日	盛岡市(岩手県庁)	毎日1名を継続して派遣(延べ40名を派遣)
4月27日～11月30日	大槌町(地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ578名を派遣)
5月1日～5月31日、8月1日～	山田町(地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ469名を派遣)
9月20日～	陸前高田市(地域包括)	毎日2名を継続して派遣(延べ258名を派遣)
5月16日～8月31日	陸前高田市・大槌町(VC)	担当日程に1名を派遣(延べ31名を派遣)
- 3) 福島県
 

4月21日～23日、27日～30日	郡山市(福島県社会福祉士会事務局)	毎日1名を派遣(延べ7名を派遣)
-------------------	-------------------	------------------

### 速報!!

#### ○石巻市の宿泊拠点が近くなりました!!

これまで、登米市のラボラーレ登米から1時間程度かけて通っていただいていたのですが、これから本格的な冬期に入るにあたり安全確保の面から、石巻市内へ宿泊拠点を引越しました。渡波包括支援センターから車で30分程と移動時間が短縮されましたので、余裕を持って活動を行っていただくことが可能になりました。

ラボラーレ登米のみなさまには大変長くにわたり宿舎を提供いただき、感謝申し上げます。

新しい宿舎は、酒屋さんを営んでいるお宅の離れ2階部分をお借りしています。みなさんが安心して活動できるよう、大家さんのご好意により、十分な広さのお部屋、備品(洗濯機・ストーブ等)を提供いただいています。

渡波包括支援センターでの活動は、3月末まで継続しますので、ぜひ支援にご協力ください!!



※離れ2階の3室をお借りしています

## 岩手県の地域包括支援センター職員のみなさまからのメッセージ

岩手県山田町、大槌町地域包括支援センターの職員のみなさまよりメッセージをいただきましたので、ご紹介させていただきます。

山田町地域包括支援センターは、保健師、社会福祉士が産休、育休のため、『マンパワーの確保』という課題を抱えながら、何をしなければならぬのか、何をしたらよいのか、手探り状態で震災対応に追われる日々を過ごしていました。しかしながら、各方面から支援を得てその体制も徐々に整い、高齢者の相談、支援業務を遂行することができました。特に日本社会福祉士会様におかれましては、早い時期から来町し被災者への巡回訪問をしていただきました。震災直後から避難所生活をしてきた被災者も、8月末で全ての避難所が閉鎖され、仮設住宅への入居も進み、『避難所から仮設住宅へ』と環境が変化しました。仮設住宅のことがクローズアップされる中、『被災地域の中にある在宅者へのケアは十分なのか?』と疑問に思い、現在は仮設ではなく在宅の高齢者への訪問をしていただいているところです。おかげさまで、今後の高齢者施策事業のための台帳整備が順調に進んでおります。活動者は、北海道をはじめ全国各地から集っていただいておりますが、寒さに耐えながらの活動にとっても感謝しております。本当にありがとうございます。まだまだ活動は続きますが、今後ともよろしく願います。 山田町地域包括支援センター



日本社会福祉士会

大槌町地域包括支援センターをご支援下さった皆様へ

震災から9カ月目を迎え、大槌町は雪がちらつき寒さを感じるようになりました。皆様には、震災後間もない津波の爪跡がそのままの悲惨な状況のなか、4月27日から11月30日まで切れ間なく578人の皆様にご支援いただきました。日本社会福祉士会様と支援して下さった活動者の皆様、活動者の皆様の御所属先へ心より御礼申し上げます。

避難所のアセスメントから始まり、義援金の受付事務、各種入力作業、仮設入居後の高齢者台帳作り・基本チェックリストの聞き取り、その他にもたくさんのお手伝いいただきました。6月からは仮設訪問、台帳作りと基本チェックリストの聞き取りを主にいただき、その台帳は高齢者の把握と相談の基礎となり、基本チェックリストの「うつ」の該当者に対して包括保健師がタイムリーに延べ232人の訪問を行い、継続支援することができました。社会福祉士の本来の仕事ではないのですが、予防事業の基礎となることをお手伝いいただきました。高齢者対象の仕事以外の方は、わからない面もあった事と思います。現在、町の検診と併せて、介護予防検診（生活機能検査）を行っております。基本チェックリストが済んでいる方々が多数いることで、検診がスムーズに進み皆様の活動が確実に私たちを助けて下さっています。

大槌町は、現在も505人の行方不明者がおりますが、8月11日に全避難所を閉鎖することができ、応急仮設住宅へ2,080世帯が入居し、大変ながらも住まう場が決まり少しずつ落ち着いてきたように思います。仮設住宅訪問の際には、被災した町民の多様な訴えを直接聞くこととなり大変な思いをされ、色々なことをお感じになったことと思います。私たちは一人一人の全ての希望や訴えを聞くことはできませんが、震災後町民の強さとたくましさも感じてまいりました。力不足ではありますが、本当に支援の必要な方に耳を傾け、向き合っていかなければならないと思っています。

支援最終日の翌日12月1日は、活動者の皆様がいらっしゃらないことをとても寂しく思いました。交通の便も悪く遠い大槌町へ駆けつけてくださり、支援していただき、同じ時を感じて下さっていることが私たち地域包括支援センタースタッフ皆の心の支えになってきたのだと思っています。混乱の中、信頼できる社会福祉士の皆様からご支援いただいた日のことを私たちは忘れることはないと思います。本当にありがとうございました。

受け入れる側として、心配りに欠けたことや、ご不満に感じたこともあったことと思いますが、この災害状況に免じてお許しいただきたいと思っております。

この先、このような悲しいことが起こらないことを願いますが、この町で見たこと、そして感じたことをご自分たちの住む町へ、事業所へ伝え、今後の災害へ備えていただき、少しでもお役に立つことができればうれしく思います。皆様の今後の健康とご活躍をお祈り申し上げます。これからも大槌町へのご支援いただければ幸いです。

岩手県大槌町役場民生部福祉課 大槌町地域包括支援センター 職員一同



## 大槌町 現在のまちの様子

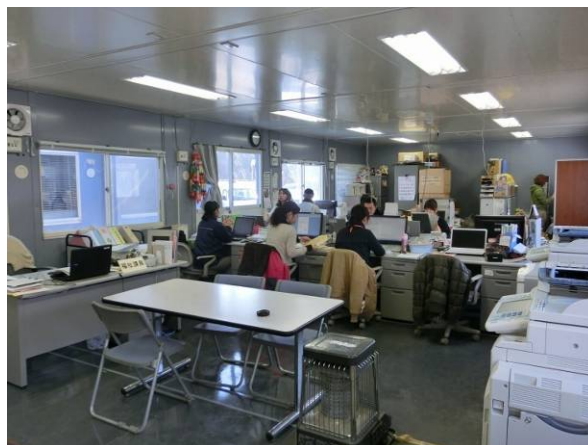
大槌町地域包括支援センター職員のみなさまより、メッセージとともに、新庁舎における包括の様子や、町の復興風景の写真を送っていただきました。

がれきや建物が撤去され、仮設商店街やスーパーが開店し、町が復興・再生しつつある、現在の大槌町をご覧ください。

(2011年12月26日 大槌町地域包括支援センター撮影 コメント：日本社会福祉士会)



大槌町役場前の様子。がれきが撤去されました。復興食堂も近くに建てられ、賑わっています。



大槌町役場仮庁舎内の地域包括支援センターです。12月に新しい建物に引っ越しをされました。



大槌町地域包括支援センターの職員のみなさまです。



被災したショッピングセンターが12月末に復活しました。



まちに活気が戻ってきています。多くの方が店を訪れています。



仮設商店街が、元気に営業中です。力強いメッセージが掲示されています。



## 岩手県こころのケアセンター職員募集 概要

岩手県では、この度の東日本大震災津波により被災された方々に、様々なこころの問題が生ずることが予想されていることから、学校法人岩手医科大学に事業を委託し、被災者に寄り添った「こころのケア」対策を推進しています。

事業内容は、「岩手県こころのケアセンター」を内陸部に、「地域こころのケアセンター」を沿岸の4保健医療圏域に設置し、仮設住宅等への訪問による相談活動、市町村保健師への専門的助言、人材の育成、調査・研究など、「こころのケア」対策を総合的に推進することとされています。

本会は「地域こころのケアセンター」における業務に従事する職員募集に協力をしています。ご意向のある方は、ホームページに掲載されている「登録票」を活用し、ご登録いただきますようお願いします。（詳細は、本会ホームページをご確認ください。）

### 1. 雇用者名

学校法人 岩手医科大学

### 2. 就業場所

地域こころのケアセンター（大船渡市、釜石市、宮古市、久慈市）

### 3. 職務内容

被災者に対する相談・支援活動、支援者支援、地域内連携促進のコーディネート、住民への普及啓発、人材育成・研修（こころのケアセンターと協働）、地域支援

### 4. 登録要件

- 日本社会福祉士会会員であること。
- 社会福祉士として、相談援助の実務経験（5年以上）があること。
- 原則として、6か月以上被災地に赴任して活動に従事できること。

※ 募集は、被災県内の社会福祉士も対象にしています。

### 5. 登録方法

- 本会ホームページに掲載されている「登録票」をダウンロードし、E-mailにて送付ください。
- 「登録票」送付先：E-mail：[info@jacsw.or.jp](mailto:info@jacsw.or.jp)
- 件名は「心のケア登録希望（ご自身の氏名）」としてください

※ 緊急告知：被災地における中長期の心のケア活動に係る登録のお願い  
[http://www.jacsw.or.jp/15\\_TopLinks/oshirase/kokoro/index.html](http://www.jacsw.or.jp/15_TopLinks/oshirase/kokoro/index.html)

### 6. 本会への登録締切

2012年1月31日（第三次締め切り）

## 7. 勤務形態・給与

### (1) 勤務形態

- ア 勤務時間 午前8時30分から午後5時15分まで（実働1日8時間）
- イ 休日 土・日・祝祭日・年末年始・その他

### (2) 給与等

- ア 年収約600万円（経験約20年の場合）、詳細は岩手医科大学給与規程による。
- イ 通勤手当、住居手当は対象者に支給。賞与あり。退職金はなし。
- ウ 雇用側で住居を準備（近隣市町村の賃貸住宅又は仮設住宅。この場合、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、衣類乾燥機、電子レンジ、ガスレンジ、炊飯器、電気ポット、座卓、ベッド、寝具一式を準備します）。
- エ 社会保険等  
健康保険・年金（私立学校教職員共済）、雇用保険、労災保険完備

## 8. 雇用期間等

### (1) 採用予定日（面接時に具体的な勤務開始日を相談）

地域こころのケアセンター：2月下旬～3月上旬

### (2) 雇用期間

- ア 採用日より平成24年3月31日（土）まで
- イ 以降、「こころのケア」事業委託契約終了（予定：平成30年度末）までの間、1年毎に更新されることがあります。

## (参考) 選考・内定の流れ

### (1) 書類選考

岩手医科大学が、応募資格の有無等について行います。

### (2) 面接

岩手医科大学が、書類選考後、面接を行います（面接日及び面接会場はおって連絡）  
面接会場までの交通費は岩手医科大学旅費規程に準じます。

### (3) 内定

内定者には、岩手医科大学から後日連絡し、健康診断書等の必要書類を提出していただきます。

以上

## 被災地支援情報

### ●宮城県・岩手県における社会福祉士の活動状況をご紹介します

宮城県においては、東松島市(4/1～9/30)、南三陸町(4/20～11/4)、石巻市では①稲井包括(4/28～12/27)、②渡波包括(5/11～) ③中央包括(6/3～9/1)で、岩手県においては、大槌町(4/27～11/30)、山田町(5/1～5/31、8/1～)、陸前高田市(9/20～)で、地域包括支援センターの総合相談の支援を行っています。

また、岩手県社会福祉協議会の専門職人材派遣事業の一環で、陸前高田市・大槌町ボランティアセンターに相談支援を行う社会福祉士を派遣しました(5/16～8/31)。この活動は県社会福祉士会に引き継いでいます。

※支援に入った会員以外でお名前の記載されている方については、お名前を出すことについてあらかじめ了解を得ています。

#### 1. 宮城県

宮城県は人口234万7300人(2011年2月11日現在)、面積は7,285km<sup>2</sup>。東日本大震災により津波による沿岸部の被害が大きく、死者9,471人、不明者1,861人(1月4日現在)という人的被害があります。(県内の避難所は昨年12月末をもって全て閉鎖されました。)

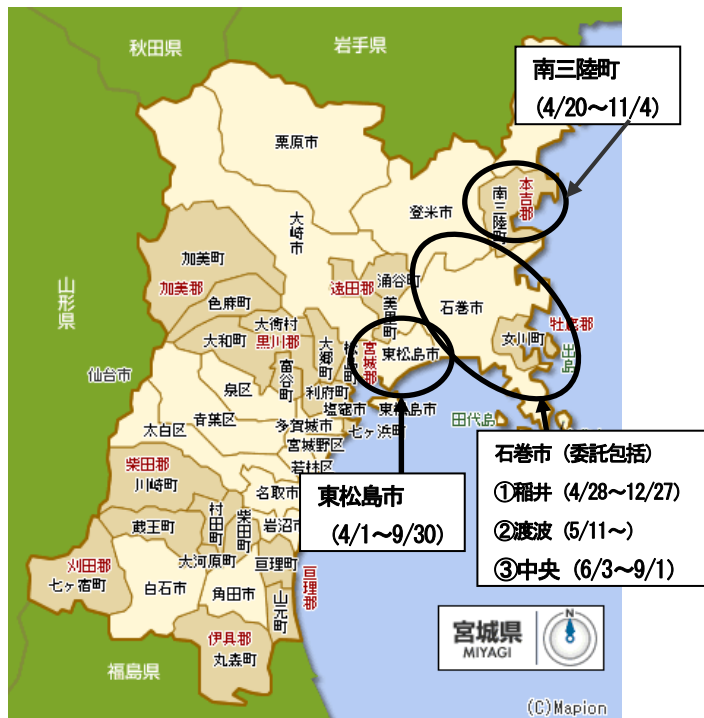
日本社会福祉士会は、宮城県からの支援要請に基づき、石巻市、東松島市、南三陸町の地域包括支援センターに総合相談を支援する社会福祉士を派遣しています。

##### (1) 石巻市(宮城県)

###### ○石巻市の概況

人口約15万4千人(2011年7月31日現在)。宮城県北東部地域を代表する都市です。明治時代からは金華山沖漁場を背景に漁業のまちとして栄え、昭和39年に新産業都市の指定を受けてからは、石巻工業港が開港するなど、工業都市としても発展を遂げてきていました。

東日本大震災の被害状況は1月6日現在で、死者3,280名。行方不明者は629名。市内に地域包括支援センターは委託型が9か所あり、宮城県からの支援要請に基づき、稲井包括(4/28～12/27)、渡波包括(5/11～)、中央包括(6/3～9/1)の3か所の委託型の地域包括支援センターに総合相談を支援する社会福祉士を派遣しています。(各2人体制)



※ Mapion より転載・加筆

#### ○「現地レポート」活動者からの声 **稲井包括**

##### ①阿部裕一郎さん(社会福祉法人コスモス、大阪) 活動日10/24～28

石巻市では、10月に入り、避難所は閉鎖され、家屋を失った被災者の多くが仮設住宅に入居されています。私たちは、稲井包括圏域内の仮設団地を連日巡回し、被災地の生活実態を掴み、さまざまな生活リスクの抽出に努めました。

印象に残っているのは、ある仮設団地のアプローチが砂利道のため、家屋外に出づらいという高齢者の訴えです。なるほど、外に出たいという意欲を阻害する要因、まさしく孤立や生活不活発リスクがここにありました。砂利道を押し車で歩く困難さを想像すること・・・こういった気づきが求められているのでしょうか。「住宅というハード」と「社会というソフト」の接点にソーシャルワークの存在価値があります。面接経過を報告した私たちに対して「市の仮設住宅担当部局に改善要望をあげます」と包括センターの担当者がすかさず言ってくれたことに安堵感を抱いたことを思い出します。

### ②菅野清さん（川崎市高津区役所、神奈川） 活動日11/13～17

今回は、前回の訪問から半年を経過した活動となりました。

当時、避難所では仮設住宅を望みながら、一方では互いに気遣い、助け合う皆さんが、「避難所のまま（この人達と）仮設に移れば・・・」と言う言葉が、耳の奥から聞こえていました。

活動は、仮設住宅の訪問が中心となりました。不在や未入居により事情が掴めないこともありました。しかし、以前の地域とともに知人や近隣とも離れ、生活の不自由さを堪えている様子を訴える高齢や障害のある方、改めて「コミュニティ」を立ち上げたいと訴える方に応接して、住宅の断熱処理の工事の騒音とともに、落ち着かない状況を受け止めました。

しかし、社会福祉協議会で編成した「見守り隊」や、定期訪問をする支援者に、地域の人達によって活動が進んでいる様子も見受けました。地域の人達による活動が継続し、さらに発展することを望みました。

活動初日、七五三で神社に詣でている家族の方がいらっしゃいました。そこからは、石巻市の被災が、まだ生々しく眼に映っていましたが、親子の笑顔は、未来を感じさせる暖かみとなり、筆者の胸を熱くさせていました。

### ③東公美さん（大阪社会福祉士会） 活動日11/17～21

ご自身のほうが被災なさって大変であるにも関わらず「寒い中、ご苦労様です。」と私達社会福祉士に声をかけて下さる地域包括支援センター職員様・被災者の方に対して、かえって私の方が恐縮しました。

もちろん、今回の本来業務は「被災されたエリアの地域包括支援センター職員を社会福祉士として後方支援する」というものです。しかし付け加えて、私にとっては今まで行ってきた①ソーシャルワーク実践と②社会福祉士養成教育・③ソーシャルワーク研究の3つが有効かつ効率的に協同して、社会全体とクライアントから認められるソーシャルワーク実践が出来ているかを確認する場でもありました（これは言うまでもなく、第一義の本来業務を一所懸命遂行する上で偶然副次的なものが発生した、ということでもあります）。

この業務を実施する中で感じた今後の自分自身の反省を含めた課題は以下の3つです。①（手話の出来る）社会福祉士・精神保健福祉士・介護支援専門員・相談支援専門員・教育者・研究者として、そして一人の人間として何が出来るのか、何をしなければならぬのかを再検討する。②今回の震災および震災関連に対する対応を教訓として、今後の震災での被害を減らし、より良いソーシャルワークを実施するための支援体制システムの構築を検討する（日本周辺では4つのプレートが地球の地殻を動かしているため、約百年間の歴史に記録されているように、日本は震災や風水害が多い国であるといえます。したがって今後、日本のどこかで震災等が発生する可能性が高いと言わざるをえません）。③前述②の実現のために、社会福祉士・教員・研究者・ソーシャルワーカー職能団体として社会福祉士養成教育・現任者教育等のより一層の充実を図る。

最後に、石巻市・石巻市稲井地域包括支援センター・仮設住宅にお住いの被災者の皆様・中央共同募金会・本事業実施に必要な物品を無償または少額でご提供くださった企業様をはじめとする、本事業実施の際にご協力下さった全ての皆様に心より篤くお礼申し上げます。そして、震災で亡くなられた方のご冥福をお祈りし、被災者の皆様が一日も早く復興に近づかれるよう願ってやみません。

### ④山本健明さん（やまもと社会福祉士事務所、東京） 活動日11/17～21

稲井包括に行くのは今回で4回目です。7月に初めて行った時、膨大な仮設住宅の数に、高齢者全員を把握するのは10月ぐらいまでかかるのではと思ったのですが、11月現在でもまだまだ終わっていません。いまだに手つかずのところもいっぱいあります。いったいいつまでかかるのかと茫然としてしまいます。

今回、仮設住宅を訪問して感じたのは、不安や悲しみを訴えてくる人が減ってきたことです。夏のころは訪問すると不安や悲しみを訴えて1時間ぐらい話し込む人が多くいましたが、今回の訪問ではそういった人が少

なくなっていました。震災から時間が経ったためかもしれません。

一方で、今回も仮設の近所に知り合いがいなくて話し相手がいないという人がほとんどでした。入居して時間が経っても地域のコミュニティ形成がなかなか進んでいない様子がうかがえました。

#### ⑤盛田朝美さん（大阪） 活動日 11/21～25

仮設住宅を訪問させて頂く中で、震災当時のお話を聞かせて頂いたり、お寿司屋さんでTVでは放映できない状況であったりしたことをお聞きしました。そして、仮設の住民から、医師団、ピースボート、アンケートなど色々な団体の訪問があり、団体のベストの色で判断し、詐欺や不審者もいるので、名札だけでは信用されないことをお聞きしました。

仮設の玄関前は瓦礫が敷き詰められており、木のスロープ工事も追いつかず、足の不自由な人は外に出られずに困っていました。また、寒くなってきたのに断熱工事遅れており、材料も不足しているので断熱材もだんだんと薄くなっているという不満の声もお聞きしました。

それから、避難所での繋がりから認知症の方のサポートを依頼されたり、心の蟠りの話を聞かせて頂いたりなど、観察・傾聴・連携でサポートの必要な方々が、まだまだおられると思いつつ帰ってきました。

#### ⑥佐藤雅美さん（本町地域高齢者支援センター、神奈川） 活動日 11/21～25

活動に入る前夜、宿泊地のラボラーレ登米では流れ星も流れる冬晴れの満天の星空でした。活動先に向かう道なりの山肌の紅葉も見ながら、この美しい東北の自然と同じ「自然」が今回甚大な被害をもたらしたことにやるせなさを感じながら活動を開始しました。活動させて頂いた稲井包括のエリアは企業誘致予定だった広大な地に、宮城県最大級の仮設住宅が立ち並び、さらに増設されているため実態把握訪問も難航している状況でした。

出会った住民や稲井包括職員の方達から聞かせていただいた体験が、これから生活されていく中で大きく影響していくであろうことを想い、同じ包括センターの従事者として、これからの復興への長い道のりにエールを送ることしかできないもどかしさを感じ帰路につきました。

#### ⑦菅根麻季子さん（大阪社会福祉士会） 活動日 11/25～29

大きな規模の災害で仮設住宅という新たなコミュニティが出来、地域支援と個別支援の仕事を両面で実施していかなければならない地域包括支援センターのお手伝いを少しでも出来たらと思い参加しました。稲井地域では全く世帯状況の分からない仮設住宅の訪問と前任者が訪問し不在だった住宅の再訪問を行い高齢者世帯の生活状況の聞き取りを行いました。仮設住宅に移ってきて約2か月経ち「ほっとしている」「寒い冬が迫っておりどうなるか不安」、「足や腰が痛む中で住宅の入り口までの段差や砂利が外出の妨げになっている」という声が多く聞かれました。現地には住民同士の繋がりが無いことを懸念し自ら地域づくりに取り組む住民の方や社会福祉協議会の巡回訪問員もおり今後包括支援センターと上手く連携を図っていったら良いと感じました。短い期間で十分なお手伝いが出来ず残念でした。

#### ⑧徳久和彦さん（神奈川県社会福祉士会） 活動日 11/25～29

主に訪問した開成11・12団地の仮設生活は、高齢者にとって買い物に不便な上、通院ではタクシーを使わざるを得ない、取り付けられたエアコンより電気こたつの方がいいと思わせるもののように。そんな中、住まいは同じ形でも、得意な編み物に、高齢者大学で学んだダンス・・・そして、魚の日干しと、人それぞれの中に、全てを失ったわけではないという自分への言い聞かせをしているかのような前向きな様子の方も。一方、なんの拠り所を見いだせない、何かを求めるといふ意欲さえなく、不眠を訴える人。私の判断能力・行動能力・専門性の低さを感じてしまった今回の活動から学んだことは、被災地だけでなく、全国のどこにもある高齢者の訴えなのか、自分が住む地域の人への訪問を通して検証してみたい。

**⑨熊崎信康さん（特定非営利活動法人 五つのパン、神奈川） 活動日 11/29～12/3**

2か所の仮設団地を訪問したが団地によって構造に差があり、風除室のある団地では比較的話もしやすいが、未だ断熱材や二重窓の設置工事中の団地もあった。また、経済的な面から暖房を控える方もあり寒さを訴える方も多く、じっくりと耳を聴ける姿勢で臨む一方、寒い日、天候の悪い日の訪問にはかなり気を遣った。また、平日日中のせいか不在率がかなり高く、ガスメーターの使用量と近隣の話から入居手続きはしているものの生活をしていないと思われる部屋も相当数あった。

宿泊場所のラボラーレと稲井包括の間は片道約1時間かかる。慣れない土地で路面の悪いところもあり、退勤後の街灯のない夜道の運転はかなり注意が必要。とくに後半からは疲れも溜まってくるため、お互いに疲労度も確認し合いながらの運転を心がけた。これから降雪や路面凍結の可能性があるので、十分注意して頂きたいと思います。

最後に、温かくフォローして下さった稲井地域包括支援センターの皆様、パートナーの松永さん、同宿のメンバー、そして引き継ぎ日にお世話になった牛タンの店「たんたん」を始め地元の方々にお礼を申し上げます。

**⑩松永健志さん（社会福祉法人晋栄福祉会、大阪） 活動日 11/29～12/3**

稲井地域包括支援センターでの主な活動内容は①仮設住宅入居高齢者の台帳整理②仮設住宅入居者のニーズ調査及び未調査世帯の情報収集③市役所への代行申請でした。

訪問先では津波で流された自宅から唯一見つかった花瓶を家宝にしていると話される方や震災で亡くなられたご家族の写真をみながら生前の思い出話をされる方もおられ、震災が与えた心の傷が垣間見えました。お話を聴きすることで、当時の状況を思い出し、かえって辛い思いをさせてしまったのではと考える事もありましたが、入居者の方々のお気持ちを受け止め、生活ニーズを把握し、地域包括や担当機関につなげることが与えられた役割だと考え、業務にあたりました。

厳しい寒さが続きますが、被災された方々とその支援にあたられている皆様のご健康と一日も早い復興を心からお祈りいたします。

**⑪関口洋明さん（社会福祉法人健光園 高齢者福祉総合施設ももやま、京都） 活動日 12/3～7**

東北地方に縁があって生活していた私にとって震災は、他人事とは思えないくらいの出来事でした。その震災から半年以上が経過した時、住民の方々への支援はより一層必要になるのではないかと思います、活動に参加させて頂きました。震災の爪痕の残る中、具体的には仮設住宅で生活されておられる高齢者の実態把握を中心とした訪問活動、情報整理でした。

個々の訪問活動では不在の方が多く、訪問を二度三度と訪問するといった、継続の大切さを感じ、さらに社会福祉士としてこの支援活動を継続し、質を担保するためのツールとして記録の重要性を再認識することができました。最後に受け入れ地域包括支援センターの職員の皆様と今回、一緒にペアとして活動して頂きました会員の方に御礼申し上げます。

**⑫林田一義さん（小規模多機能居宅介護しんじょういこい、福井） 12/7～11**

はじめての社会福祉士としてのボランティア活動参加だったので大変緊張していましたが、前任者と今回2人で一組になる相手の方がベテランだったので安心しました。稲井包括支援センターの方の話では、この包括が担当する地域が一番仮設住宅数が多くて、なかなか手が回らないのが現状だと言っておられました。しかし、仮設住宅が設置されて相当期間が過ぎており、一通りの聞き取り調査は済んでおりました。そこで今回は、いままで聞き取り調査ができなかった不在者宅の再調査と高齢者の1人暮らし宅のその後の様子伺いを中心に活動しました。もう既に仮設住宅を出られた方もおり、対応の難しさを痛感しました。

**⑬安川朱実さん（社会福祉法人五常会、大阪） 活動日 12/7～11**

今回の活動内容は仮設住宅入居者の区分確認（高齢単身・高齢世帯・高齢含む・その他）と継続ケースの訪問が主でした。

震災より9カ月が経ち、働きに出ている方、介護保険のサービスを使っておられる方等皆さんの置かれている環境も様々となり、支援の難しさを感じました。

また仮設住宅には他の機関（NPO 法人、市社協等）も訪問しており、入れ替わり立ち替わり訪問を受ける皆さんにとってはかなり負担になっていたように思いました。情報が共有できるシステムづくりや復興の状況に応じた支援活動が求められていると感じました。実際に活動し感じたことは、聞き取り調査表の工夫も必要だと思いました。フリーで記入する形式は、前居住地を聞くだけでも土地勘のない私にとっては難しいものでした。予め地区名を入れておきチェックするだけにする等の工夫が必要だと感じました。

非常時には各機関の連携が重要になるので、日頃から連携を心がける事の大切を学ぶことができました。

最後に、「働く場所がある」と言う事が一番の支援だと感じました。

#### ⑭小川貞一さん（NPO法人評価機関あんしん、大阪） 活動日12/11～15

震災発生から9か月、仮設住宅は充足し、冬本番を迎えて出入り口の二重扉化等の冬対策工事が始まっています。従来と異なる地域にある仮設住宅の新しい訪問計画が開始されるまでの間に、従前の訪問で不在であったところや健康上の課題を残しておられる世帯を一斉に訪問するように包括より命じられ、1軒ずつ訪問し、時間をかけてお話を伺おうと考えていた私は対象数の余りの多さに戸惑いましたが、地域包括の仕事では中堅者として活躍中の相棒の機転で、問題なく訪問することができました。住民の方々は、入居後2～5か月経過し、ご家族の新たな健康問題や就労の課題を抱えておられること等が分かり、より丁寧な訪問姿勢と包括支援センターとのより密接な連携が求められるとの認識をもちました。

#### ⑮宮田純子さん（追浜地域包括支援センター、神奈川） 活動日12/11～15

初めて参加し多くのことを教えていただきました。震災直後、仙台の知人から繰り返し語られる思いや辛さに想像ができず、聞き手としても気持ちがいっぱいになり思いを馳せることができずにいました。仮設住宅の皆さんを訪問させてもらい、道端で休んでいる方とお話し、また津波のきた場所などを見せていただいたことで、やっと震災がもたらした現実を実感しました。震災に遭われた方の気持ちに思いを馳せること、受け止めるということが分かってきたように思いました。いま私にできることは、現地の変わり行く生活や、さまざまな思いで過ごしていること周囲に伝えることだと思います。「このことを忘れないでね」という言葉に思いがぎゅっと詰まっているように感じました。瓦礫撤去や住宅など環境の変化、仮設住宅での近所付き合い・・・住民の方の生活の変容に即した“つなぐ・つながる”というお手伝いが継続的に必要だと感じました。稲井包括の皆さん、お心遣いに感謝いたします。

#### ⑯山本健明さん（やまもと社会福祉士事務所、東京） 活動日12/15～19

稲井包括に行くのは今回で5回目です。今回は9月末に入居が始まった仮設住宅団地の初回訪問調査を行いました。今回の訪問調査をもって、稲井包括が管轄する全ての仮設住宅団地の初回訪問が完了（訪問時不在宅を除く）したことになります。約2700世帯という膨大な仮設住宅を一通り回るだけでもかなりの時間と労力を要しました。

しかし、これでやっとスタート地点に立てたのであって、これからが被災者の生活支援の本番だと思います。今後どのような支援を展開していくか、また他機関との連携や仮設住宅におけるコミュニティ形成など、まだまだ多くの課題があります。孤独死を防ぎ、被災した皆さんが希望を持って生活を再建できるように、今後も何らかの形で支援を続けていきたいと思っています。

#### ⑰比名陽子さん（社会福祉法人ひびき福祉会、大阪） 活動日12/23～26

仮設の訪問の他に、これまでの調査の資料から、データの整理もさせていただきました。膨大な資料が前任の方々の活動の積み重ねであることの「重み」を感じました。資料をもとに仮設を訪問し、「前回訪問した際に、お体の具合が悪いとお聞きしましたが、いかがですか。」と声をかけると、皆さんほんの少し笑顔を見せて下さったことが、この活動が引き継がれてきたことの意味を感じることができる瞬間でした。しかし、生活の復興についてはまだまだだと感じました。ニーズを拾い上げる中で、一人一人の思いに寄り添いながら、その人の

力を信じ、支援していくこと、現地のスタッフにしかできないことが、これから多くあるのだと思います。福祉の実践者として社会的弱者と呼ばれる人たちの立場に立ちきること、それを支える仕組みを良いものに変えていくこと、の大切さを改めて考えさせられる機会でもありました。同じ立ち位置にある実践者の一人として、被災地で学んだことを無駄にしない実践を大阪の現場で積み上げていきたいと思っています。

#### ⑩齋藤弘昭さん（さいとう社会福祉士事務所、神奈川）活動日12/23～26

4月28日からスタートした石巻市稲井包括支援センターの最後の支援チームとなった。クリスマス寒波が来ていて雪交じりの風の中仮設住宅を回った。2か月前に話を聞いた住民と再会する。玄関には風よけのスペースができています。大きな声を掛けないと中まで聞こえない。何度か呼びかけると人懐こい顔が覗いた。「特に変わったこともないよ。今もそこで野菜を貰ってきたところだ」と話をしてくれた。仮設住宅の雰囲気もだいぶ生活感が出てきているように感じる。最後の日は、今までの調査を集計した。多くの社会福祉士が仮設住宅を訪問し聞き取った報告書からは、みんなの熱い気持ちを感じることができた。今回の支援が終わっても、「また来ますから、ぜひ呼んでくださいね」と所長に挨拶した。また、5月から支援基地となっていた登米市のラボラーレも今回の支援チームが最後となった。スタッフのみなさんお世話になりました。

#### ○「現地レポート」活動者からの声 渡波（わたのは）包括

#### ①影山理恵さん（静岡県社会福祉士会）活動日11/15～19

渡波地域包括支援センター第48陣として活動いたしました。

初日の引継ぎで私が目にしたのは、道路の位置も変わった地区で日常生活を過している方々でした。まだ8か月過ぎただけなのに、頭の下がる思いでした。2日・3日目、仮設住宅のニーズ調査では、皆さんが今後への希望と不安をお話し下さいました。その思いを感じ、私なりに見守り続ける事で、なんとか寄り添いたいと痛感しました。4日目の網地島の個別訪問では、大きく変化した地形と不便さの中で暮らす方々に、生活者としての力強さを感じました。私たちができる事のヒントを頂いた気がしました。5日という短期間の経験ですが、私の体感を、私の表現で周囲に伝えたいと思いました。

#### ②阿部典子さん（社会福祉法人焼津福祉会ワークすばる、静岡）活動日11/19～23

震災後、すぐにでも被災地に行きたいと思っていましたが、自身の職場の異動など、慌ただしく、この時期になってやっと、この目で被災地を見ることが出来ました。

包括支援センターの支援ということで、センター勤務経験のない私が、「何が出来るのか?」「どんなスタンスで入っていけばいいのか?」「現地スタッフの皆さんの負担になるだけではないのか?」と不安もありました。しかし・・・とにかく行ってみなければ・・・

現地では、全般的に復旧、支援が遅れている牡鹿半島の仮設住宅へ行き、お話を伺ったり、状況の確認をさせていただいたりしました。女二人（山形の女性）では、『危険』と言われた地域でしたが（通行止めなど道路状況が悪い）そこは、勢いで・・・3日間、車を走らせました。

私たち、第49陣で、仮設訪問は終了し、今後は、個の支援から、地域支援へとシフトしていくとのことでした。ゴールには、多くの時間を要すると思いますが、あのきれいな海のほとりに笑顔が戻ることを願っています。

#### ③新谷久美子さん（富士宮市役所、静岡）活動日11/23～27

被災直後に比べれば、かなり瓦礫も撤去されているのですが、初めて現地に入った私にとっては、あれから8ヶ月以上経つのにまだこのような状況なのかと言葉も出ませんでした。廃墟となった建物、地盤沈下のため満潮時には水没してしまう道路、こちらはまだ非常時なのだ改めて感じました。

活動内容は、現在、仮設住宅の全戸訪問のステージから「仮設」「在宅」をふくむ「地域全体」をどうしていくか、というステージに変化してきているということで、地域課題解決に向け、取り組むべき事業の企画書を地域包括支援センターと一緒に考えるという指示をいただいたのですが、正直、何も取り組めないまま活動期

間が終了してしまいました。本当に僅かばかりの活動しかできなかったのですが、その中で民生委員さんや区長さんから地域の状況についてお話を伺うことができました。地震発生時の状況、震災3日後に地区で自主災害対策本部を立ち上げ住民の組織化を図り活動したこと、そして今地域が抱えている課題についてお話をいただきました。お話の最後に区長さんが、「住民が自らの力で立ち上がっていかねばならない時期にきた。リハビリと同じで与えられるだけでなく、どんなに辛くとも自主的に取り組まないといけない。住民自らが立ち上がれるようあなたたち専門家が専門性を活かした側面的な支援をして欲しい。」とお話くださり、私たちが地域に入る意義を感じさせていただきました。地域の人と人を繋げていくという取り組みは、一朝一夕でできるものではなく、どのように連続性をもってつないでいくかということも活動の課題かと思いますが、現地の方々が今だからこそ取り組む意義があると語っておられた声を活かされるよう願っております。

今回の活動では自分自身は何をしてきたのだろうか、という疑問が強く残っていますが、せめて、今回経験させていただいたことを無にしないよう、これから自分に何ができるのか問い続けていきたいと思っております。

#### ④小林麻子さん（大石田町役場教育文化課、山形） 活動日11/23～27

第2の故郷の宮城県に何か恩返し・支援がしたくて、今回の活動に参加させていただきました。

渡波地域包括支援センターにて引き継ぎを受け、さっそく活動先の牧浜（まきのはま）地区へ向かいました。

牡鹿半島内の地区は浜ごとに形成されており、未だに浜近辺ががれき・家の土台しかなかったり、浜付近の杉がてっぺんまで茶色に変色した林・地盤沈下し大潮で海水に浸食されていたりする浜辺の姿に、いかに地震と津波の被害がすさまじかったか物語っており、震災直後の半島の地区のほとんどが壊滅状態とのラジオの一報を思い出しました。

牧浜地区は3月の震災では救援物資が届かず、9月の台風の被害で道路が通行止めになり、地区内に仮設住宅ができたことで、仮設住宅入居者と在宅生活者との間にみえない壁ができてしまい、個別の援助だけでなく地域へのさまざまな援助を必要としている時期でした。

「仮設住宅がほぼ終了したから、在宅生活者への訪問調査」だけの活動と思い、参加した私には、荷が重く・時間もなく、牧浜地区への訪問だけで終了しました。課題を残したままの引き継ぎで、51陣に申し訳なかったです。

地区区長さんの話のなかで「物資の援助はもう十分頂いた。これからは、専門職の方からの心のケアの援助がほしい。復興というのは、人間が病気・ケガしたときのリハビリと同じ。辛いことに耐えながら、涙を流しながら、コツコツと頑張っていくことが復興への一歩となる」という一言が、私への支援の一言に思えました。

多忙ななか、暖かく迎えてくださった高橋センター長を始め渡波地域包括支援センターの職員のみなさま・牧浜地区の皆様感謝いたします。5日間、学ばせて頂きました。

#### ⑤中村梓さん（名護市役所、沖縄） 活動日11/27～12/1

前任より支援内容の変更があり、コミュニティの再構築に向けての『企画シート』の作成を引き継ぎました。活動期間は毎日特定の地域に通い、在宅や仮設住宅を訪問し、地域の健康教室にも参加させていただきました。他の支援団体の方と話をする機会もあり、支援団体間の連携も必要だと感じました。

地域の方々から話を聞いたり生活状況を見させてもらったりする中で、震災の爪痕が目の前に広がる状況でも一歩ずつ前へ進んで行こうとする住民の方々の姿に力をもらうとともに、そこに住んでいる人たちが地域を再構築していくのだと強く実感しました。

今回初めて支援活動に参加しましたが、一緒に活動をしたパートナーや渡波包括支援センターのみなさんの支えがあって無事引き継ぐことができました。貴重な体験をさせて頂き、得るものがたくさんありました。本当にありがとうございました。

#### ⑥山口康二さん（山形刑務所、山形） 活動日12/1～5

7月末に来た時と比べ、瓦礫に囲まれていた町は更地となり、一部の家屋は修理されていた。しかし、その感想を述べると、事情を熟知している現地の職員は、“半壊した住宅には2階に一人暮らしの高齢者が住んでおり、以前のコミュニティは完全に崩壊しています”と教えて下さった。震災前に戻ることは出来ないが、新たに震災を受けて残された家族としての一体感、その地に留まっている住民自ら、新たな地域コミュニティを再

編する営みこそが、この地に住み続ける住民の役割であることを改めて実感する光景であった。

さて、52陣で現地に入った私たちの役割は牡鹿半島の一つ、牧浜地区の住民への訪問と聞き取り調査であった。渡波包括の管内の仮設住宅への訪問が一区切りしたことを受けて、仮設住宅に入居している方と半壊した住宅に居住する方との間に、支援の濃淡や置かれた状況の違いによって、同じ被災者でありながら微妙な齟齬が生まれているため、今後に予期される地域の再編にあたって支障とならぬよう、現状の問題と、克服すべき課題を明らかにすることが目的の社会調査であった。50陣から開始され、52陣で一定の集約となった。この結果は、地区民の方にセンター長が報告する予定でもある。

牧浜地区は、津波が押し寄せ中、互いに助け合って避難し、誰ひとり亡くなる人がいなかった地区であり、且つ、地区の(元)中学校跡地に仮設住宅を設置しており、地区長が月2回の早朝集会を開催するなど、仮設・在宅の両者を結び付けるリーダーシップを発揮している地区でもある。

私たちは、通院に係る送迎体制を中心として聞き取りを行ったが、やはり、一軒聞き取るのに2時間は必要であった。それは、私たちを待っていていただいたこともあるが、通院、病気、家族、震災当時の状況、牡蠣剥きの仕事が失われたことで家に閉じこもる状態など、一見の訪問者である私たちに、教え、訴えかける切実さ故でもあった。私たちは、胸を切り開いて傾聴することが主な仕事でもあったし、それが私たちの出来ることのすべてであった。

包括支援センターとして、今後の地域住民の相互交流や地域コミュニティ再編を目的とした調査を独自で実施している例を寡聞にして聞き及ぶことがなかったが、渡波センターの、その思いを受け止め、微力ではあるが、幾ばくかのお手伝いをする事が出来たことをうれしく、そしてありがたく思っている。

#### ⑦國原昭直さん(静岡県社会福祉士会) 活動日12/1~5

私が支援活動に入った石巻市の渡波地域包括支援センターは、石巻市街や牡鹿半島などを担当しているセンターであり、私は牡鹿半島で活動したが、入り江ごとに集落が点在する地域の形態は、私の身近にある伊豆半島沿岸地域を思い起こさせるものだった。各集落ともに津波の被害が大きく、現地の惨状を見ていると、東海地震等が起きた時には伊豆半島がどのような状況になるかは容易に想像ができた。

私は今回、この半島のある地区で地区長や民生委員の理解と協力を得て医療ニーズを中心とした聞き取り調査を実施した。その結果、この地区が抱えている課題は、震災以前から存在してきたものであり、それが震災を機に顕在化したものであるという結論に達した。従って、この地区が抱えている問題をすぐに劇的に改善することは困難であり、しばらくは現状を維持していくしかないが、この調査の結果を地区長や民生委員に改めてデータという形でお返しすることにより、この地区のコミュニティの再構築や新たなアクションの材料として役立てていただこうということになった。

活動中は調査に伺うと、皆さんが温かく迎えてくださり、今回の震災のことはもちろん、地区の長い歴史のことや地区住民のつながりのことなどいろいろな話をしてくださった。中には2時間以上お話しくださる方もおり、1日活動して2件しか訪問できない日もあったが、毎回のように長時間話を傾聴することは時間的な面から考えても、包括職員ではなかなか難しい。そういう意味では、私たちボランティアにしかできないことを、少しは行うことができたかと思っている。

話を聞いている中では、自立に向けて皆さんが前を向いて歩き出していることを実感することができた。これから現地で活動に入る皆さんも、社会福祉士会から派遣されるボランティアとして、住民の自立を支援する地域包括支援センターの側面的支援者という立場を忘れずに、“自分たちにしかできないこと”を意識して、活動に取り組んでいただけると良いのではないだろうか。

#### ⑧横山栄子さん(株)サン十字、山形 活動日12/5~9

活動中印象に残ったことは、訪問時、多くの方が復興に向けて「自立しなければ」との思いを持っていること。家族や親戚、近隣者を亡くされたり、「支援が届かない」「資金がない」「仕事がない」との話をされたりしながらも自宅を新築、改築しながら、生活の基盤づくりを各人が行っていたこと。『悲しみを乗り越える』と言うことは、現実を見て行動することから始まることではとの思いを強く感じた。

訪問地域は住居の多くが撤去された中にポツンと1、2軒が建っている状態で、防犯に対する不安や話し相手の不足の感はいくつか拭い去れない。あるお宅では半日話を伺った。「話を聴いてくれる人もいない」＝「話をしたい」ことであり、聴くことの重要性を改めて感じた。

**⑨鈴木清美さん（米沢市南原コミュニティセンター、山形）活動日12/17～21**

68歳になって、身の程知らずの思いの中、再度この活動に参加しました（前回は南三陸町）。今回もチームを組んだ静岡の石原さん始め関係者のご協力を得て所期の任務を果たすことが出来ました。厚く感謝申し上げます。

今回は自宅や借家等が被災し、一時避難所や親族の家等で生活し、自宅等が修復を終わって、あるいは修復をしながら生活している方々（高齢者や障害者に限らず）の「生活の支障と生活ニーズ調査」でした。在宅避難生活をしている方々の実情や生活ニーズを知ることが出来、私達が取り組んでいる地域の自主防災組織作りにも役立てていきたいと思っております。有難うございました。

**⑩石原圭一郎さん（在宅介護支援センターふじみ台、静岡）活動日12/17～21**

震災後の5月、思い出多き奥松島地域の、津波被害の無慈悲さに言葉を失って以来、災害ボラとして地表や床下から被災地を眺めていた。それは被災者の目を見る支援に自信がなかったのも事実。その中でも「専門職として何か」との思いが膨らみ今回の派遣に応募、第56陣の渡波包括支援に参加させて頂いた。私たちは被災地域の訪問調査を継続。初日から小雪の舞う日々が続き、「寒いでしょ」と住民の方から逆に励まされてばかりの活動だった。各所から家屋修繕の鋸音が聞かれ、大規模店舗の再開が相次ぐなど復興の兆しが拝察される半面、賃貸住宅の訪問では、被災後やむなく同地に期限付き転居をし、地域と関わらず生活を営む話を伺うなど、コミュニティ復興の難しさを実感した。個人としては反省ばかりが残る支援であったが、高橋センター長様をはじめ渡波包括の職員様からの温かい対応、そして全国から集まった同志の皆様から力を頂き活動を継続できたことに感謝したい。

**⑪原内玲子さん（ケアマネジメントみどりの風、静岡）活動日12/25～28**

12月25日、年の瀬の石巻市は強い風が吹き、雪が舞っていました。私たちは黄金浜地区の訪問をしました。黄金浜は2メートル近い津波で被災しながらも自宅で生活を続けている方がいる地区でした。訪問した家庭はどちらも、快く私たちに話を聞かせてくださり有難いと思いました。健康状態や日常生活の困りごとを聞きとるとともに、コミュニティの現状を把握するように務めました。自宅で生活する家には物資やお金が届かないと話される方がいる一方、震災以降地域や親族のつながりが強くなり、助け合っているとの話も伺いました。80代の一人暮らしの方は「足が痛くて風呂掃除が大変だがリハビリと思ってやっている」と笑顔で話してくれました。50代の方は「仕事が見つからず失業手当が切れたらどうしたらいいか」と不安そうでした。山積みになった瓦礫や礎石だけの市街地、冠水する道路を見ると、復興はまだ長い道のりと実感でき、これから私に何ができるのかと考えながら戻りました。

震災後の激務を続けながらも、私たちが明るく受け入れてくださった渡波地域包括支援センターの皆様、登米で合宿し雪道を運転してくださった社会福祉士会の仲間感謝申し上げます。

## 2. 岩手県

岩手県は人口 1,327,153 人（岩手県人口推計 2011 年 3 月 1 日現在）、面積は 15,278.88km<sup>2</sup>と、日本で 2 番目に広い面積を有する県です。

岩手県は、東日本大震災により津波による沿岸部の被害が大きく、1 月 13 日現在で、死者 4,667 人、不明者 1,368 人、負傷者 188 名という人的被害がありました。

日本社会福祉士会は、自治体からの派遣要請を受け、4 月 27 日より大槌町、5 月 1 日から山田町、9 月 20 日より陸前高田市の地域包括支援センターにおける支援活動を開始しました。

### (1) 大槌町（岩手県）

#### ○大槌町の概況

人口 15,293 人（2010 年 10 月 1 日現在）。岩手県の沿岸部に位置し、南は釜石市、北は山田町、東は太平洋に面しています。

被害状況は 1 月 13 日現在で、死者 802 名、行方不明者は 505 名。11 月 17 日現在、町内 2,106 戸の仮設住宅に、2,080 世帯、4,762 名の方が入居されています（※グループホーム型仮設住宅を除く）。大槌町では、2011 年 12 月末に、復興基本計画が策定されました。

岩手県大槌町からの支援要請に基づき、岩手県長寿社会振興財団の支援を受け、大槌町地域包括支援センターに総合相談を支援する社会福祉士を派遣しました。（4 月 27 日～11 月 30 日）

#### ○「現地レポート」活動者からの声

##### ①近藤恵二さん（スマイルウェルフェア総合福祉事務所、岡山）11/23～11/27

今回、縁があって岩手県大槌町地域包括支援センターにおいて、生活支援調査や台帳作成などを行いました。報道などで状況などは確認できたが、実際現地に入ってみると正直想像以上のものでした。まるで戦争のあとみたいで、家の土台だけが残っていて、明らかにここまで津波が来たということが、状況で判断できるぐらいであった。報道ではだんだんと復興してきているという状況も伝えられていたが、現実には厳しいことが活動初日に痛感した。

その中で、活動がほぼ仮設団地の訪問であったので、震災の状況も利用されている方から聞くこともできた。ある高齢者が「地獄絵図」と表したように、かつて見たこともないような状況だったのであろうと感じた。またある高齢者は、「鼻まで泥水が来て、もうだめだと思ったが、たまたま量が流れてきて、それにつかまったら屋根まで上げて助かった」とか、「夫と避難して、その避難所も危ない状況だったので、一緒に逃げようと言ったが、夫が拒んだので、先に行っていると夫が流された」など、本当に何とも言えなかった。しかし、そのようなつらい悲しい状況なのに、私たちに「ご苦労様」「いつもありがとう」と笑顔で対応していただいた。

私は、この笑顔はすごいかけがいのないものだと感じた。もう一度大槌町を復活させる気持ちも感じられた。逆に雪が舞う寒い日ではあったが、暖かく私を元気づけてもらったような気もした。この笑顔の温かみやたくましさ、現状をわが県でも伝え、少しでも多くの人に受け継ぎ（例えば娘の小学校で、子どもたちに講演会を実施します）、どんな形でもいいので継続的に支援を続けてい



※ Mapion より転載・加筆



東北魂！！



活動中に虹を発見！

きたい。それが被災地の復興や生活している人たちの笑顔がたくさん生まれるように、活動していきたいと感じている。「福祉は笑顔を生む仕事」これは以前の職場の先輩に教えていただき、まさしく社会福祉士はこの言葉がよく合うと感じている。ぜひこれからも被災地支援に協力していきたい。

## (2) 山田町 (岩手県)

### ○山田町の概況

人口 17,639 人 (2012 年 1 月 1 日現在)。岩手県の沿岸部に位置し、南は大槌市、北は宮古市、東は太平洋に面しています。被害状況は 1 月 13 日現在で、死者 604 名、行方不明者は 165 名。山田町では、12 月末に、復興後の町が目指す将来像と、その実現のために必要となる具体的な事業施策や事業期間を示す「山田町復興計画」を策定しました。

岩手県山田町からの支援要請に基づき、山田町地域包括支援センターに、被災エリアの在宅高齢者に対する全戸調査、総合相談等を支援する社会福祉士を派遣しています。(5 月 1 日～5 月 31 日、8 月 1 日派遣を再開、当面は 2 人体制、1 月末より 4 人体制に増員予定。)

### ○「現地レポート」活動者からの声

#### ① 柘植将介さん (株) メッセージ アミーユ浄心、愛知 活動日 12/5~12/9

山田町地域包括支援センターにおいて町内全世帯 65 歳以上の高齢者を対象とした健康状態等の聞き取り調査を行う支援活動に従事しました。前任者からの引き継ぎを受け、ペアの方と一緒に担当地域を訪問し、直接ご本人、ご家族とお話をしながら高齢者の方がいる世帯の状態を確認して回りました。

現地の生活状況は震災後 9 か月が経とうとしていましたが、壊れたままの堤防が手つかずのままだったり、がれきが放置されたままなどまだまだ復興は進んでいない様子です。

5 日間では主に船越地区を担当しましたが、地区には漁港もあり、漁師の方や漁業に携わっている方も多く、船や車が流され生計が立てれない、生活が難しいという状況を伺いました。

その中で現地の方はこれからの生活の不安を抱えながらも、近隣の方と助け合いながら生活をされ、逆にそのたくましさにこちらがたくさんのことを学ばせていただきました。短い期間でどれだけお役にたてたか分かりませんが、活動に参加する機会を与えてくれた日本社会福祉士会に感謝し、今後も機会があれば意識的に被災地への支援活動に協力していきたいと思えます。



## (3) 陸前高田市 (岩手県)

### ○陸前高田市の概況

人口 24,246 人 (2011 年 3 月 11 日現在)。岩手県の沿岸部に位置し、南は宮城県との県境、北は隅田町、西は一関市、東は大船渡市と太平洋に面しています。被害状況は 1 月 13 日現在で、死者 1,554 名、行方不明者は 298 名。岩手県陸前高田市からの支援要請に基づき、本会では、陸前高田市地域包括支援センターに、総合相談、権利擁護事業を支援する社会福祉士を派遣しています。(9 月 20 日より派遣を開始、2 人体制。)

陸前高田市地域包括支援センター支援に向けた本会の活動内容として、1 月より仮設住宅の独居高齢者の台帳再構築と訪問調査を開始しています。



## ご支援いただきありがとうございました

本会では、被災者の方々への支援活動を行うため、会員の皆様にはボランティアの登録や活動支援金の寄付のお願いをしております。また、各種団体・企業等に対しては活動に必要な資金や資材の提供をお願いしております。

ご支援、ご協力いただきましたみなさまに紙面を借りてお礼を申し上げます。

この度の震災への支援は、長期にわたる息の長い支援が必要です。会をあげ、支援への取り組みを推し進めておりますが、この活動の継続には、人材・資金・資材・情報が必要です。重ねてみなさまのご協力をいただけますようお願い申し上げます。

### ○支援金

3月14日から開始した活動支援金の募金につきましては多くの方にご協力をいただきありがとうございます。12月31日現在までに14,904,140円のご協力をいただきました。今回の支援金の主目的は、会員が被災者へ相談支援等を行うための資金と位置づけています。単に見舞金として募金するのではなく、今後長期にわたるとされる被災者への生活支援に向けた活動を行うための資金です。当面の目標額の1,000万円を超えましたが、引き続き募金活動へのご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。活動支援金の収支状況については会員専用ホームページに掲載する月報でご報告します。

また、社会福祉専門職団体協議会宛に全米ソーシャルワーカー協会から3万ドル、韓国社会福祉士協会から2千万ウォンの支援金をいただきました。職能3団体（日本精神保健福祉士協会、日本医療社会福祉協会、本会）で有効活用することとし、本会は約130万円を支援金として活用します。

### ○助成金

中央共同募金会の赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」助成事業から300万円の助成が決定しました。大和証券福祉財団「災害時ボランティア活動」助成事業から50万円の助成が決定しました。ジャパン・プラットフォーム「共に生きる」ファンドから500万円の助成が決定しました。当助成金は、主に被災地での支援活動に活用します。



### ○PC等機材の提供

東日本大震災 ICT 支援応援隊様からパソコン6台及びUSB型データ通信機器6台を6月30日まで無償貸与いただきました。（パソコン2台は株式会社東芝様から、データ通信機器6台はKDDI株式会社様から7月1日寄贈。パソコン4台は日本電気株式会社様から引き続き無償貸与。）誌面をかりてお礼を申し上げます。キャノンマーケティングジャパン株式会社様からプリンター6台を提供（寄贈）いただきました。誌面をかりてお礼を申し上げます。これらは、活動支援拠点となっている宮城県及び岩手県の地域包括支援センターで活用しています。

### ○車など物資の提供

JLER ルーテル教会救援様から車3台を5月21日から9月20日まで無償貸与いただきました。株式会社ガリバーインターナショナル様から車1台を6月21日から11月4日まで無償貸与いただきました。誌面をかりてお礼を申し上げます。これらは、活動支援拠点となっている宮城県の地域包括支援センターで活用しました。

### ○携帯電話の提供

ソフトバンクモバイル株式会社様から携帯電話20台を無償貸与いただきました。誌面をかりてお礼を申し上げます。これらは、活動支援拠点となっている宮城県及び岩手県の地域包括支援センターで活用しています。



## 支援にご協力いただける皆さまへのお願い

**みなさまのご協力をお願いします。**

### ○ボランティアなどの協力は、都道府県社会福祉士会を通じてお願い致します。

被災地の社会福祉士会で、「〇〇の〇〇です。何をすればよいですか。」と個別に連絡される方への対応に時間が取られてしまうという状況が生じています。

本会のボランティア派遣の活動者の登録を行っています。現在の活動者登録は地域包括支援センターの総合相談支援の活動者となります。

登録を希望する方は、日本社会福祉士会ホームページの東日本大震災災害対策本部情報の社会福祉士被災地支援者（ボランティア）募集から登録フォームをダウンロードし、必要事項を記載の上、ご所属の都道府県士会にお送りください。

派遣者の調整は、登録フォームに記載された派遣可能な日程に合わせてコーディネートしています。折角ご応募いただいたにも拘わらず、現地との調整においてご希望に応えられない場合もあります。希望された日程の1週間前迄に電話連絡が無かった場合は、今回は現地の支援日程と合わなかったため派遣の対象とならなかったとご理解いただけますようお願いいたします。個別のご連絡はいたしませんので、その際にご容赦いただけますようお願いいたします。

上記の活動以外にも、被災地からの要請に応じて活動者登録のお願いをする予定です。

被災地の社会福祉士会のスタッフ自身が被災された中での活動をしています。現地の負担とならないよう、組織としての活動にご協力いただきますようお願いいたします。

### ○支援金のご協力をお願いいたします（被災者の生活支援に向けた活動を行うための資金です）

今回の支援金の主目的は、今後展開する会員が被災者への相談支援等を行うための資金と位置づけています。単に見舞金として募金するのではなく、今後長期にわたると思われる被災者への生活支援に向けた活動を行うための資金です。

#### 【支援金の振込口座】

郵便振込口座

加入者名：社団法人 日本社会福祉士会 口座記号番号：00150-0-687734

（個人で匿名希望の方はその旨記載をお願いします。）

ご協力をいただいたみなさま、ありがとうございます。

### ○詐欺にご注意ください

静岡県内で、「社会日本福祉会」「社会福祉協会」など本会と似通った名称を名乗る男性から、一般家庭に震災の義捐金を募る目的の電話（非通知）をかけ、集金訪問するといったケースが数件起きているとの連絡を静岡県警からいただきました。

本会では、支援金の募金に関して、個別に集金などは行っておりませんので、ご注意くださいようお願い致します。